

高良聖先生を偲んで

本学文学部心理社会学教授の高良聖先生が、2017年1月31日にご病気のため亡くなりました。享年63歳でした。すでに1年余の月日が経過したとは思えぬほど、高良先生の残像はわれわれの心にとどまり続け、その存在の大きさをかみしめる日々を過ごしてきたように思われます。

高良先生は、2004年に着任され、心理社会学の創設期のメンバーのひとりとして学科を率い、心理社会学科長や心理臨床センター長等の要職を歴任されてきました。また、栗原彬先生、弘中正美先生、杉山光信先生、三沢直子先生ら同じく創設期の先生方が退任された後は、教育、研究、学科運営等、あらゆる面においてわれわれをリードしてくれる、まさに大黒柱と言うべき存在でした。

先生のご専門は集団精神療法、特にサイコドラマの研究と実践の第一人者で、長らく日本心理劇学会の理事長を務めてこられました。サイコドラマにおける先生の臨機応変さは他の追随を許さず、ドラマの世界を通してメンバーに気づきを促す技法は秀逸であったと伺っております。また、先生のプロデュースするサイコドラマにもう参加できなくなってしまったことに、大きな衝撃を受けている方が大勢いらっしゃることも耳にいたしました。

先生は、日々の臨床活動も精力的にこなされていました。毎週片道2時間近くのドライブをこなして、栃木県の精神科クリニックの心理カウンセラーとして、多くの患者さんの支援をされてきました。患者さんとの面接においては、そこで交わされるひとつひとつの言葉よりも、むしろ全体の流れを大切にす臨床家でした。たとえば、クライアントが「死にたい」と訴えてきたときに、「死にたい…(うなずき)」という応答もあれば、「絶対死んではいけないよ」という応答もあります。どちらがクライアントに対する機能的な応答であるかは、クライアントの病理だけでなく、その場の「雰囲気」を考慮することが重要であり、臨床家にはその場の「雰囲気の察知能力」が重要だということです。このことは、著書の『雰囲気としての心理面接—そこにある10の雰囲気—』（日本評論社）に詳しく記されています。

また、著書の中で、セラピストには「筋肉運動系」と「思考内省系」という2つのタイプがあり、ご自身を「筋肉運動系」のセラピストであると断じています。考えることよりも行動を好み、セラピストが積極的にクライアントに介入し、関与する能動的サービスを提供するセラピストだからだということです。ある時、先生が担当しているクライアントの問題がどうしても改善せず、「こんな問題を抱えているケースの場合、認知行動療法ではどんなやり方をしてるんだい？」と質問されたことがあります。「一般的にはこのような方法がありますが、こんなやり方をしている人もいますよ。」と、聞きかじりの知識を伝えたところ、「それいいな。今度試してみよう。」と破顔されたことを今でも覚えています。流派にとらわれず、クライアントの問題の改善につながるのであれば、どんなサービスでも提供しようとする先生の考え方は、同じ「筋肉運動系」である私に、臨床実践上の大きな自信を与えてくれました。

私と同様、心理社会学の多くの教員および学生、臨床心理学専修の大学院生は、高良先生から大き

高良聖先生を偲んで

な刺激を受けてきたことと思います。先生は常々「臨床ができなくなったら大学を辞める！」と口にされていましたが、最も充実した臨床活動をされている時に、終止符を打たなければならなかったことを、心より残念に思います。

心理社会学科では、2018年度より、新たに「哲学専攻」が開設されます。また、臨床心理学専攻では、学部、大学院ともに公認心理師の養成に対応するためのカリキュラムに改編されます。心理社会学科の新たな船出にあたり、先生から受け継いだ財産を、今後の学科の発展のために活かしていくことが、われわれ残された者の役割であると思います。

2018年3月

明治大学文学部心理社会学科長

岡安 孝弘